猛打賞

プロ野球随想

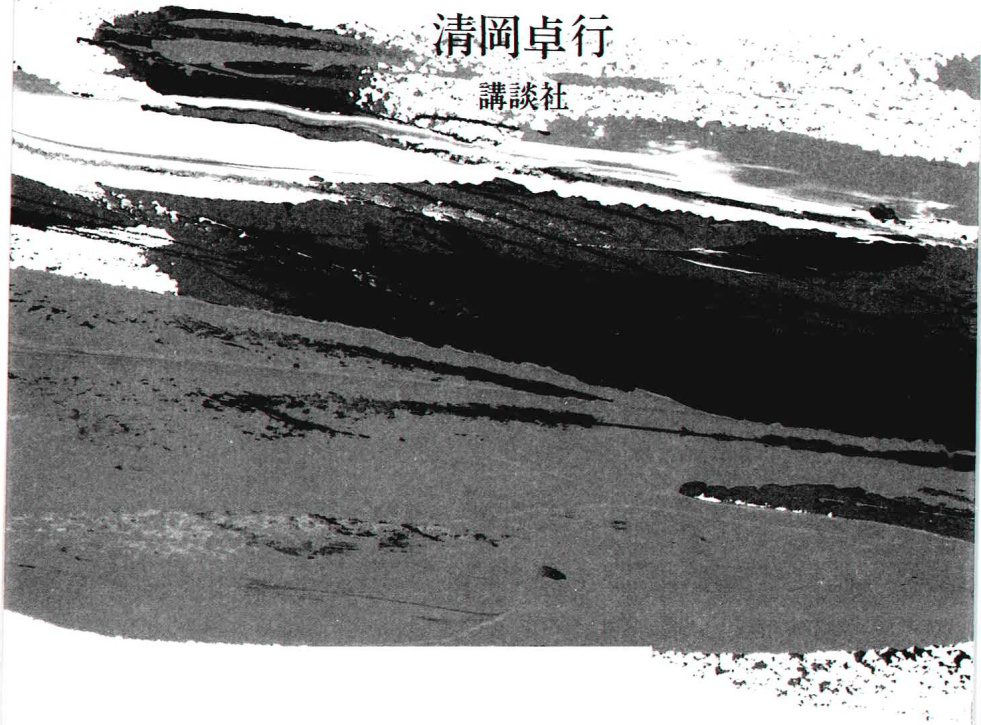
清岡卓行

孟打賞

プロ野球随想

清岡卓行

講談社



猛打賞（もうだしょう）

一九八四年九月一〇日　第一刷発行

著者――清岡卓行（きよおかたかゆき）

© Kiyooka Takayuki 1984, Printed in Japan

発行者――加藤勝久

発行所――株式会社講談社
東京都文京区音羽二―三―三　郵便番号二三　電話東京〇三―九四五―一二一（大代表）　振替東京八―二九二〇

印刷所――豊国印刷株式会社　製本所――黒柳製本株式会社

定価――一二〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-06-201491-2 (0)　（文1）

プロ野球随想　猛打賞　目次

I 随想

猛打賞と木挽町……11
ホームラン競争……16
——王貞治とハンク・アーロン
背番号……19
——巨人〈1〉は田部武雄など
ホームランのお出迎え……21
平常心……24
——掛布雅之のモットー
素手にバット……27
——落合博満の三冠王
柔軟無類のグラブさばき……30
——山下大輔賛

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

秋霖のなげき……33
——江藤慎一の後ろ姿
期待のひびき……35
ホームラン　二つの〈詩〉……38
——王貞治の世界新記録突入に
さらば　比類なきホームランの夢……46
——王貞治の現役選手引退
一本足打法……53
名人を知るものは名人……58
——広岡達朗と吉田義男
ある野球人の劇的な生涯……64
——スタルヒンの栄光と苦難
満員のなかの孤独……73
日本プロ野球史の一端……77
野球体育博物館で……82

初夏のちいさな喜び……88
——バッティング・センターで

Ⅱ　詩にあらわれた野球

清水哲男と平出隆の詩作品から……95
夏の夜の風物詩……102
（私の作品から）
アカエリヒレアシシギ……106
スタジアムの寂寥……113
球あそび……121

Ⅲ　夢にまで見るプロ野球

朗読の録音テープ……129

遅すぎる……138
便器と包丁……149
記念写真……155
五十六歳の初夢……159

Ⅳ　小説の人物によるプロ野球談義

戦死したプロ野球選手のベストナイン……167
——沢村栄治や景浦将など
延長世界記録の試合と〈日本人にとって野球とはなにか〉……188
あとがき……218

プロ野球随想

猛打賞

装　幀・安野光雅

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

随

想

猛打賞と木挽町

プロ野球セ・パ両リーグのペナントレース、および日本シリーズが行われているあいだは、テレビでその試合を眺めることが、私にとって一種の中毒のようになる。その習慣にどっぷりつかっているとき、自分で自分がいやになることもあるが、競技進行中の画面から、生の現実にしかないなにかを吸収しているような、ちょっと楽しい気持ちになることもある。もっとも、テレビを媒介としているのに、生の現実にしかないなにかとは厳密な言いまわしではあるまい。本を読んだり、音楽を聞いたり、映画を見たりするときには味わえない、深くざらざらした偶然につらぬかれたなにか、とでも言いなおしたほうがいい

だろう。その独特ななにかの度合いがいちじるしく集中されるときは、こちらの気持ちも一瞬、いわば現場における事実だけがかもしだす酩酊感に、快く誘われてゆくのである。

さて、テレビでプロ野球に耽溺する私の癒しがたい習慣を持ちだしたのは、そこにときたま現れる猛打賞というものに触れたかったからだ。一試合に三安打以上を記録した選手に贈られるこの賞について、その三本目の安打が出た直後に場内放送されることがある。たとえば、「本日の試合に三本の安打を放ちました谷沢選手に、猛打賞が贈られます」といったふうに、女性の場内アナウンサーの声が聞えてくるのである。あるいは、賞金品に関係なく、ある選手がこの試合で三安打以上放ったという意味だけで、この言葉がテレビのアナウンサーによって用いられることもあるようだ。このようなとき、私の胸はいつも少し痛み、頭の中にはいつも、木挽町という今はなくなった古めかしく好ましい地名が、ちらっと浮かんでは消えるのである。

猛打賞と木挽町！　この取り合わせはまことに突飛なものと思われるだろう。私はその理由を語りたいのだ。いくらかは自慢話のようにひびくかもしれないが、しかたがない。私の胸の中には実際に、少しばかり得意な気持ちがあるのだから。

それは戦後四年目の初夏のことである。東京都中央区木挽町の昭和通りに面する一角

に、歌舞伎座別館というビルが立っていた。晴海通りに面する歌舞伎座のほうは戦災で焼失したままで、雨期にはその跡が水溜りになったりしていた。この二つの建物はもともとは裏側で接続する関係にあったが、本館のほうはまだ再建されておらず、無疵の別館のほうが貸ビルのようになっていたのである。（現在の町名でいうと、どちらも銀座四丁目十二番地ということになる。）

この歌舞伎座別館の一階に、株式会社日本野球連盟があった。社長は鈴木龍二であった。セ・パ両リーグに分裂する前年のことで、日本のプロ野球の興行にかんし中央集権的な組織であった同連盟は、いかにも戦後的な活気に溢れていた。この建物の地階がサロン春という酒の場所で、三階が進駐軍将兵のダンスホールであった。メーデーの行進が大きな声で歌いながら窓の傍らを通って行ったりした。私はその年の四月に、この連盟の入社試験を受けて新社員となっていた。二十六歳で、まだ大学の学業半ばであったが、給料をもらわなければ家族を養って行けなかったのである。

私が所属したのは事業部で、いわば連盟の副収入を目ざすところであった。私の担当した仕事は、球場内広告放送、ホームラン賞などの賞金品、選手のサインなどを用いた文具、そうしたものの管理で取扱手数料の収入をあげることであった。選手に贈られる賞

は、最初のころ、野村証券からのホームラン賞、大阪商事からのファイン・プレイ賞、ミノファーゲン本舗からのシャットアウト賞、それに、スポンサーがはっきり思いだせないが、たぶんシオノギ製薬からの満塁ホームラン賞であった。

四月の中旬に後楽園で、巨人の川上哲治選手が南海との試合に満塁逆転サヨナラ本塁打を放ち、プロ野球界の話題をさらった。連盟の事業部においては、満塁ホームラン賞とホームラン賞の手数料が入ったということで、ある刺戟であり、ある暗示であった。（ついでに記せば、賞金は前者が一万円で後者が五百円であった。一振りで一万五百円という余分の収入は、初任給六千円の私には驚異であった。）川上選手が賞金のスポンサーのところへ挨拶に行ったという話がつたわり、連盟では彼の礼儀正しさが賞賛されていた。

仕事に熱心で商売の上手な徳永繁雄事業部長はある日、選手のプレーへの賞をふやして取扱手数料の収入を多くすることを考えた。そして、部員六名に向かい、よく考えてスポンサーのつきそうな新案を出すように言った。部員たちは喜んでいろいろ考えた。――サヨナラ・ホームラン賞、盗塁賞、ダブル・プレイ賞、ファースト・ラン賞、猛打賞、その他さまざまな候補が出た。

私の思いついたのが、一試合三安打以上の選手へ贈る猛打賞である。これは私自身には

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com